クセになる。八尾の人、まち、自然、うまいもん

Yaomania

【ヤオマニア】Vol.16　2016年・秋号

ようこそ!
お地蔵さん大国・
八尾へ。

お寺に、町に、山に、街道に……
あなたが手を合わせているお地蔵さんは
意外な歴史をくぐり抜けて、ここにいる!

第2特集は八尾の秋祭り

ヤオマニアの横顔
上田秀人さん(作家)

Yaomania Vol.16 秋号 2016年9月15日発行 発行=(一社)八尾市観光協会 八尾市北本町2-1 ベントプラザ20号 ☎072-997-6226 編集=140B 定価0円 Printed in japan

水呑さんへの入り口

ジェラートカフェ モンテローザ

昔、水呑さんは弘法大師ゆかりの
湧き水で知られる旅人の休み処でした。
今、その里山に、モンテローザ。
高安地域の集いや身近な憩いの場として
親しまれています。

里山の手作りジェラート

「しきファーム」で育てた旬野菜と、
地元農家から仕入れた果物など…
素材の良さから生まれるフレッシュな味わい。
メニューはどれも店長（管理栄養士）おすすめ。
体にやさしい安心の美味しさです。

Gelato Cafe MonteRose

〒581-0854　八尾市大竹7丁目87番地　TEL 072-970-5151
営業時間　10時～17時(夏期は18時まで)　定休日 水曜日(7月~9月は休まず営業)

お地蔵さん大国、八尾のシンボル「常光寺」。

**八尾の人にとっては
「普通のこと」かもしれないが、
初めて訪れた人にとっては、
町のあちこち
（それも一つや二つの町ではない）に
お地蔵さんがいることに驚く。
明治以後に造立されたものもあるが、
500年以上前に造られたお地蔵さんが、
これまた「普通に」人びとを迎える。
「お地蔵さんをめぐれば、
八尾の歴史が分かるかも」
そんなことを考えながら歩いてみました。
まずは、「八尾と言えばこの地蔵」から。**

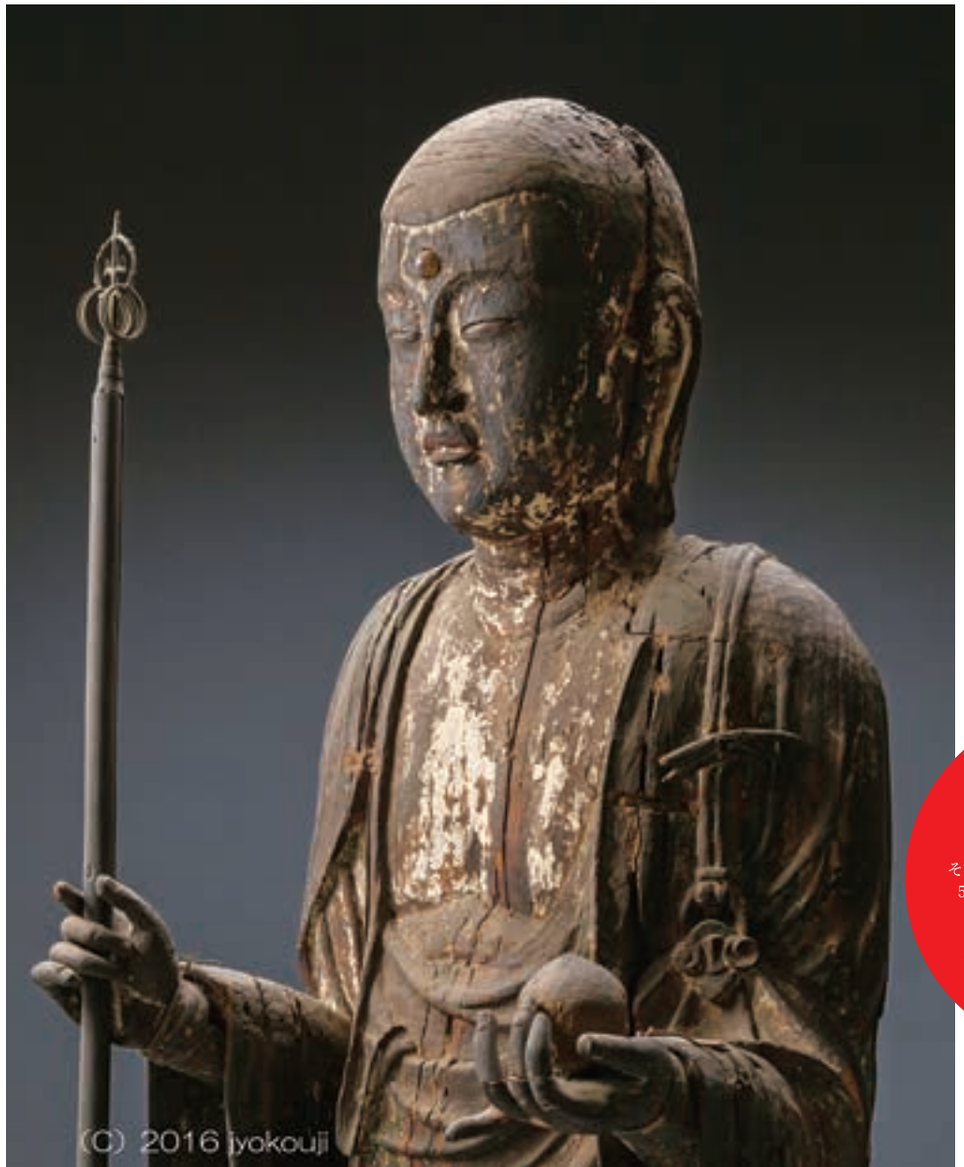
取材・文＝きむあつこ　写真＝内池秀人

「西の最高位」だった全国区地蔵。

江戸時代に大流行した、諸物をランク付けする番付表に、庶民に親しまれたお地蔵さんも取り上げられた。元文3年（1738）発行の『諸国地蔵尊番付』によると、国内に数多あるお地蔵さんの中で常光寺の八尾地蔵が西の大関（当時は最高位）にランクイン。

「この評価は、仏像の大きさ等ではなく、参詣人の多さなんです。八尾地蔵は平安時代、六道の辻で衆生を救うお地蔵さまに会ったといわれる小野篁（おのの たかむら）の作と伝えられています（室町時代前期の製作とも言われている）。地蔵菩薩が閻魔大王に手紙を託す『狂言八尾』が非常に有名になり、ここが安産祈願の寺としても知られたことから大勢の参詣人が来られたのでしょう」と住職の片岡英俊さんは語る。

常光寺本尊地蔵菩薩立像（八尾市指定文化財）
秘仏だが毎年地蔵盆踊り（8月23・24日）に公開される
写真提供／八尾市立歴史民俗資料館



八尾は大昔から「地蔵の都」。

常光寺で行われる春の「大般若会（だいはんにゃえ）（八尾地蔵練供養）」は、赤青鬼や閻魔王、七如来、地蔵菩薩の面（ほぼかぶりもの）をつけた人々や僧侶、稚児が境内を練り歩き、地獄極楽の様子を伝える。「家内安全と町内繁盛を祈る儀式。にぎやかで楽しいですよ」。河内音頭の聖地と言えるこの場所での地蔵盆踊りといい、八尾の風物詩はお地蔵さんとの関わりが深いことが分かる。

「お地蔵さん」とは何だ?

お地蔵さんは「地蔵菩薩」の親しみを込めた呼び名である。そもそも地蔵菩薩は釈迦がいなくなり、56億7000万年（!）後に弥勒菩薩が出現するまでの不在期間、人々を六道（地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅道・人道・天道）から救うために登場したとされる、いわばヒーロー的な存在だ。

境内にある水子地蔵は永禄元年（1558）の造立。桶狭間（おけはざま）の戦いよりも古い

修復工事を経て美しくなった山門前に立つ片岡住職。天保9年（1838）に建立された八尾地蔵尊の石碑もある

お願いごとが書ける「ほほえみ地蔵」。うん、ご利益ありそうだ

常光寺

臨済宗南禅寺派のお寺。奈良時代、聖武天皇の勅願で行基が創建したと伝えられる。大坂夏の陣では長宗我部盛親と藤堂高虎の戦いで、藤堂軍（徳川方）の陣がここに置かれ、勝利をおさめた。藤堂家の墓もある。山門前には「河内最古の音頭発祥の地」の石碑が立つ。●八尾市本町5-8-1　☎072-922-7749

※参考文献：谷野浩『八尾の石仏』（1987年・八尾市教育委員会）、『八尾の地蔵さん』（2001年・八尾市立歴史民俗資料館友の会石造物部会）

お地蔵LOVEを訪ねて❶　恩智編

名前（シュミイ）の由来より肝心なのは〝想い〟ですよ。

恩智三町（北町・中町・南町）の中で「伝統やしきたり、昔ながらの人間関係が恩智でもっとも色濃く残る」中町にある「シュミイ地蔵」の造立は天文13年（1554）。伝承も風化してしまう時の流れだ。不思議な名前のいわれは地蔵講の人たちでさえも知らず、八尾市教育委員会の石碑にも「その由来は分からないが」と刻まれている。

俗説の一つは、「その昔、お地蔵さんにお性根（魂）を入れようと小便をかけたら『しゅみた（沁みたの訛り）』って言うけど、ほんまかいな（笑）」。また「一休和尚のシムカイ地蔵」と呼ばれていたことから、シムカイ＝温かく死を迎えてくださるという意味が訛って転じたとする説も。

以前はもっと南にあったのを移動させたらしい。京都−高野山を結ぶ東高野街道沿いという立地もあってか、「昔は遠方からもご利益がある言うて、ぎょうさんお参りしはったんですよ」と、お堂の掃除やお供えなど、お世話役のご近所さんはほほ笑む。毎日手を合わせては「今日もありがとうございます」と感謝すると聞き、大事なのは想いなのだと痛感する。

恩智にお地蔵さんが多いのは、至るところに人の想いが溢れている証だ。住んでなくても恩智に魅せられる人が多いのは誰にもある地元愛と共鳴するせいかもしれない。私も子ども時代を過ごした恩智愛が高じて『オンヂキタマチ帖』なる冊子を自主制作したほどだからよく分かるが、その地元愛は500年前から続いていたのか。

取材・文=西村由起子　写真=田村和成

右／総高158cm、幅68cmの舟形光背。像高は105cmと大きい。全部で大小4体の柔和で美しいお地蔵さんが鎮座　左上／東高野街道沿い、宝形造（ほうぎょうづくり）の地蔵堂の左手には恩智城趾に至るキツネ坂。その昔、キツネがよく出没し人を化かしたとか　左下／シュミイ地蔵を造った有志たちor末裔たちの名前?

お地蔵さんがいっぱい、の町。

八尾の「お地蔵さん密集地帯」は寺内町あり街道あり山道ありと、実にバラエティ豊かだ。どのエリアのお地蔵さんも地元の人たちがお世話をしているが、これは「地域の子どもたちの面倒をみんなで見る」ことでもある。お地蔵さんを通じて「地元の長〜い歴史」を垣間見ることができます。

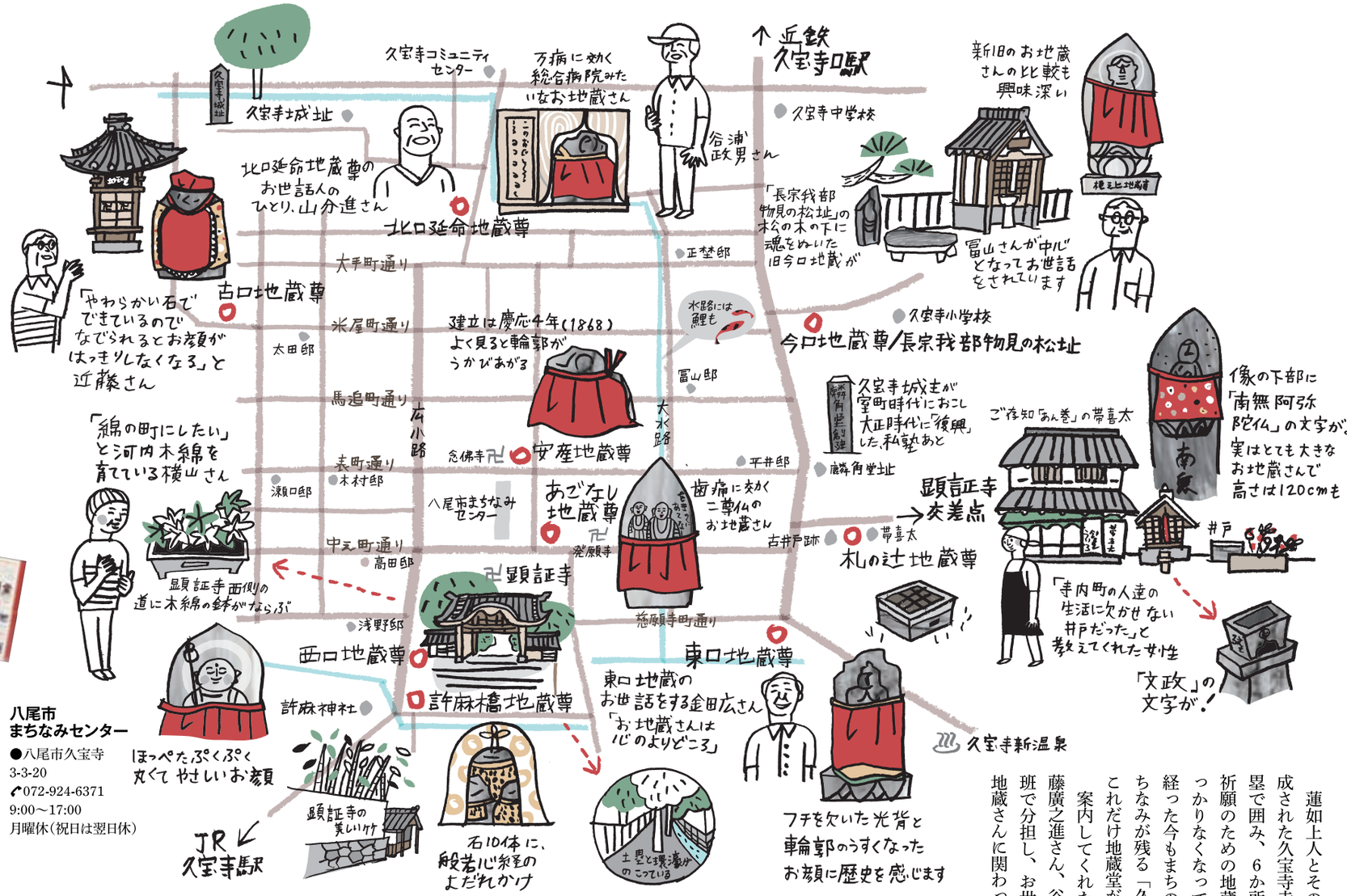
取材・文=きむあつこ　イラストマップ=日比野尚子

そのー 久宝寺寺内町

お地蔵が「結界」を示す中世の町並み。

蓮如上人とその子孫が地域を開き、顕証寺を中心に戦国時代に形成された久宝寺寺内町。戦乱を避けるため、まちの周囲を環濠や土塁で囲み、6か所の出入り口には朝夕開閉する木戸口（門）と安全祈願のための地蔵堂を設けた。環濠や土塁、木戸は一部を残してすっかりなくなってしまったが、地蔵堂はどれも健在。約500年が経った今もまちの守り仏として大切に管理されている。歴史的なまちなみが残る「久宝寺寺内町」は散策コースとして知られているが、これだけ地蔵堂がまとまって残っているところも珍しい。

案内してくれたのは八尾市まちなみセンターの冨山喬三さん、近藤廣之進さん、谷浦政男さん。「寺内町の地蔵堂は昔の町割りによる班で分担し、お世話しています。つまり、町内の全員がどこかのお地蔵さんに関わっている」（近藤さん）のであった。



北口延命地蔵尊

霊験あらたかな延命地蔵とされ、「病気でお困りの方、寝たきりの方はお参りください」という文言が掲げられている。谷浦さん曰く「昔の人は貧しくて医者にかかれなかったので、お地蔵さんに熱心に拝んでいたんです」。ここは扉を開けてお参りできる。

西口地蔵尊

1790年頃、お逮夜市の日に大火事が起こり、平野口にあった地蔵堂が焼失したため現在地（西口）に移動。ここが火元だった場所といわれる。ご利益は家内安全、町内安全。南町地蔵尊、平野口地蔵とも呼ばれる。

許麻橋地蔵尊

地蔵の脚部が土に埋まっていて掘り起こしたときに腰の部分が折れたので、腰折れ地蔵とも。ご利益は安産。天文21年（1552）の銘が。

札の辻地蔵尊

かつて高札場（昔の掲示板）があったのでこの名が付いた。念仏講の人たちが造立した阿弥陀石仏で、室町時代末期の典型的な作風。ご利益は歯痛。

今口地蔵尊

樋之尻という川底から出土したため、樋之尻地蔵とも。お堂の建て替えの際に地蔵も一新し、室町時代前期に造られた古い地蔵はお堂の近くに置いてある。ご利益は目の病気、以前は目洗いの水があった。ここのみ、扉に鍵がかかる。世話役でもある冨山さんは「400年以上続く地蔵盆を八尾の文化遺産として残していければ」と語る。※P13も参照

古口地蔵尊

宝形造の立派なお堂。ご利益は歯痛。

安産地蔵尊

念佛寺の横にある地蔵堂。お堂は本葺瓦で漆喰を塗った壁、彫刻も立派。弘法太子と地蔵を祀っている。

あごなし地蔵尊

阿古那（あこな）という娘が歯痛で苦しむのを見て小野篁が地蔵像を刻み彼女に与えると歯痛が止まったとか。ご利益は口の中の病気・歯痛。「をきのくに（隠岐国）あこなし」と陰刻され、分祀されたもの。

東口地蔵尊

かつてあった寺の名前にちなみ、慈願寺地蔵とも、北向地蔵ともいう。ご利益は夜泣き（子を背負い、無言で人に会わないように下を向いて参る）と歯痛（おたふく豆を埋めて願をかける）の言い伝えがある。

お地蔵LOVEを訪ねて❷　亀井編

「お地蔵MAP」でまち歩きを。

再開発が進み、新住民が増えるJR久宝寺駅の南側。亀井小学校区のまちづくり協議会では、「若い人にも地元の歴史が分かるようなものを残そう」と中筋史郎さんが中心になって『わがまち歴史マップ』を2013年から編集・発行する。〈古代編〉〈古墳・飛鳥・奈良時代編〉の後、今年1月には第3弾〈地蔵尊編〉が登場。文明13年（1481）造立の「油掛地蔵」から2012年に移された「一願地蔵尊」まで8つのお地蔵の「不思議なご縁」も紹介。

取材・文=中島 淳　写真=内池秀人

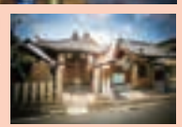
油掛地蔵（上）とお地蔵さんの似合う町並み。MAPは八尾市観光案内所でも配布している

お地蔵LOVEを訪ねて❸　東本町編

「高地蔵」を守って160年余。

堂々たる古民家が並ぶ近鉄八尾駅南側（東本町）一帯で、和菓子の［興兵衛（よへえ）桃林堂］と光明寺の間に、文明3年（1471）に造立された高（多嘉）地蔵が祀られている。花崗岩製で総高214cm、像高165cmと大きく、ふくよかな表情に思わず和む。17世紀後半、三田浄久の『河内鑑名所記』にも「東郷村石の高地蔵あり」と記されているほど。近くに住む安田竹次郎さんによれば、安田家は安政3年（1856）からお世話をしているそうだ。

取材・文=中島 淳　写真=内池秀人

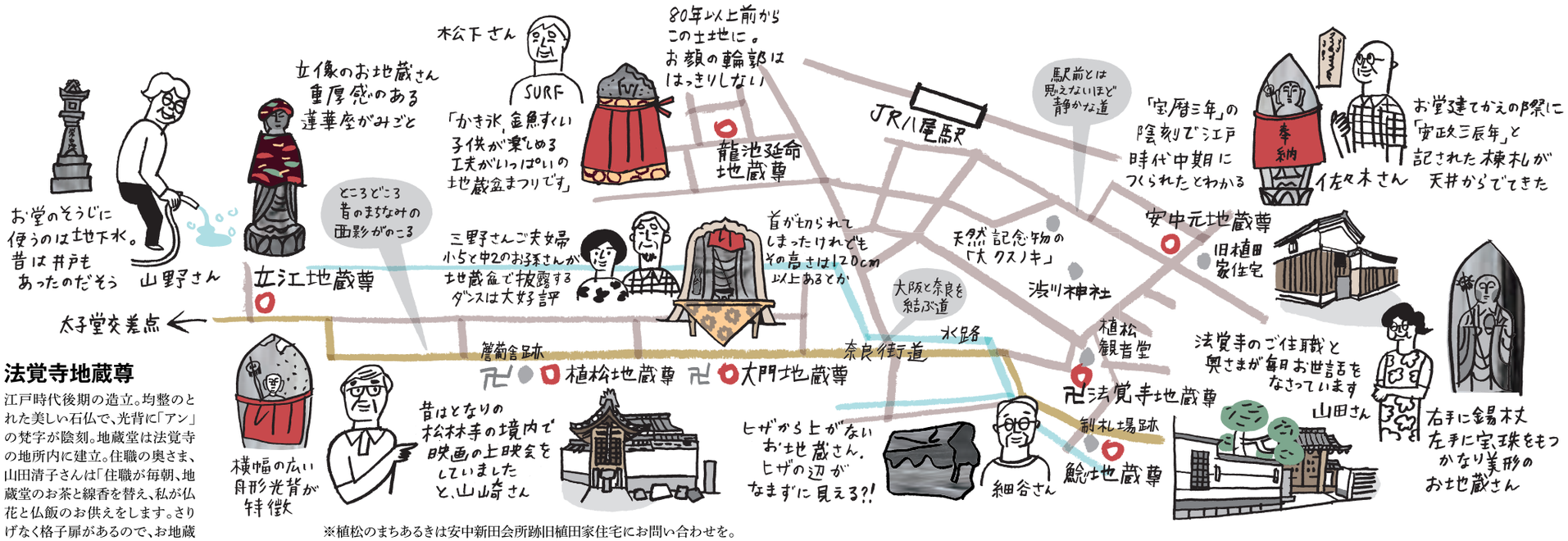


「室町時代の傑作」と名高い高地蔵も、橋代わりに使われていた時代があった（P8本文参照）

その2 植松
いにしえの大街道に、七つの顔。

古代より、旧大和川（現・長瀬川）の堤防沿いにつくられた奈良街道は、大阪と奈良を行き来する主要交通路として大いに賑わったが、旧大和川は暴れ川だったため度重なる水害に悩まされた。そのため18世紀初頭、現在の大和川に「付替え」がなされ、かつての川が埋め立てられた。開発された「新田」は綿の一大産地に発展する。

その一つ、安中新田の会所があった植松は古い町割りや伝統家屋、寺院、道標が多く残る町で、東西を横切る奈良街道を中心に旅の安全や道しるべとして多くの地蔵堂が建てられた。それらは「植松七地蔵」と呼ばれ、地元の人びとの力で代々守られている。



※植松のまちあるきは安中新田会所跡旧植田家住宅にお問い合わせを。
八尾市植松町1-1-25　☎072-992-5311　9:00～17:00　火曜休（祝日は翌日休）　入館料一般200円

法覚寺地蔵尊
江戸時代後期の造立。均整のとれた美しい石仏で、光背に「アン」の梵字が陰刻。地蔵堂は法覚寺の地所内に建立。住職の奥さま、山田清子さんは「住職が毎朝、地蔵堂のお茶と線香を替え、私が仏花と仏飯のお供えをします。さりげなく格子扉があるので、お地蔵さんがいることに驚かれます」と。

龍池延命地蔵尊
大正末期、龍華町から植松町に。龍華町の池島さんが始めたのが名称の由来とか。地蔵盆は子どもに大人気。15人でつくる講の松下繁男さんは「70代が主体で地蔵堂の水替えや掃除をしています。お盆直近の日曜に金魚すくいや当てもの等をこども会と一緒にやっています」と語る。

鯰（なまず）地蔵尊
凝灰岩製で、元々は半跏相の地蔵だった。膝から下部分が鯰のように見えるのでこの呼び名がついた。川から流れてきた説もある。子どもが好きで、75歳のときに地蔵講に参加したという細谷晴美さん。「白なまずは皮膚病に効くといわれ、昔はなまずの絵を描いた絵馬が奉納されていました」

植松地蔵尊
江戸時代後期の造立で、線香台には文政7年（1824）の銘が陰刻。幕末の私塾［簷葡舎（えんほしゃ）］があった松林寺の門脇にある。お世話をする10軒でつくられた講の山崎浩史さんは、小さい頃の話をしてくれた。「地蔵盆のあとは、新世界に食事に出かけるのが講の楽しみやったそうです」

大門地蔵尊
旧大和川沿いの龍華寺の大門に祀られていた地蔵。花崗岩製で、植松では最も古い鎌倉時代の造立。何者かに袈裟斬りに遭い、仏頭を欠いたとか。お世話する6軒の1つである三野勝伯さん・教子さん夫妻は「夫婦のどちらかが必ず朝夕お参りしています。気持ちがすっきりしますね」と話す。

立江（たつえ）地蔵尊
凝灰岩製で、江戸時代後期の造立。四国の立江寺（徳島県小松島市）から明治の終わり頃に分祀された。お世話をする6人の1人、山野隆子さんは「願いごとをよう聞いてくれますねん。安産や子授けとかね。ここで拝み、子どもを授かったからと毎日熱心にお参りする人もいますよ」と語る。

安中元（やすなかもと）地蔵尊
花崗岩製の美しい地蔵で、江戸時代中期（1753年）の造立。地蔵堂は1856（安政3）年に建立し、1974（昭和49）年に改築された。詠歌講のメンバーでお世話するようになり、その子孫の1人、佐々木利一さんは「2か月に1回、拭き掃除などで集まります。心を穏やかにさせてくださいます」と語る。

その3（番外編） 十三街道
山道に60体。みなお顔が違う！

「お地蔵さんがたくさんいたはる場所ですか？　やっぱり十三峠（じゅうさん）に行く道かな」

表紙にどこを描いてもらおうかと思案していたときに、ある人がこう言った。たしかに秋らしくていいが、表紙で描こうと思ったら、真夏に行かねば。

「服部川の駅から歩いて峠まで!?」須飼さんが不安そうに訊いてきたが、駅から取っ付きの神立辻地蔵（江戸時代の造立）まで登るだけできっとバテるはず。少しズルしてタクシーで向かう。

遠くに大阪の高層ビル街が見える。地蔵堂でお参りして一歩踏み出した瞬間に〝お地蔵さんラッシュ〟となった。大体が二体一組。広い農道を越えると本格的な山道だが、樹木の陰で直射日光から救われる。そしてよだれ掛けもカラフルなお地蔵さんが次々と姿を現すが、どれもまた微妙に表情が違う。地蔵、阿弥陀、観音がそれぞれ二体ずつ組み合わせられ、峠の急坂を登る旅人の安寧を祈って造立された。地元の人に聞くと「お地蔵ごとの当番」というのは特にないらしい。神立辻地蔵から約1㎞の間に60体以上のお地蔵さんに出会う。よく見るとよだれ掛けを取り替えずに、新しいものを上から掛けてある。「ほんと、見てるだけで癒されますね」

真面目を絵に描いたような、スリムで健脚の画家が思わず微笑む。

1時間もかからぬうちに水呑地蔵に到着。空気が澄んでいる時は明石海峡大橋まで見える。「生水は飲まないでください」と書いてあるが、好きな人はポリタンクに入れて持ち帰り、沸騰させてから使っているようだ。水呑地蔵まではクルマで行く人も多く、この峠道の「お地蔵、お地蔵、またお地蔵」は意外に知られていないかも。

そこからさらに15分登り、十三塚のそばに腰を下ろしてお弁当を広げ、そのあと十三峠の地蔵の前で記念撮影。目の前に信貴生駒スカイライン。花園ラグビー場の向こうに大阪の街が見える。

「奈良から来た人にも大阪から登ってきた人にも、このお地蔵さんと景色に救われたでしょうね～。いや～、やっぱりここまで来てよかった」。この秋、十三街道を歩いて、ぜひ須飼さんと同じ気分になってください。表紙とP15「表紙のことば」もぜひ。　取材・文＝中島 淳

どんどん高度が上がっていくが、至るところにいるお地蔵さんに驚く画家

1神立辻の地蔵尊から歩き始める　2さっそくお地蔵さんが街道沿い民家のブロック塀に　3山道に入ると、ブルーのよだれ掛けのお地蔵さんが　4おなじみ紅いよだれ掛けも　5二人の表情といい、よだれ掛けの色といい、和めます　6「三十番」の表示があるお地蔵さん。「セキカメ」とは何の名前か？　7仲が良すぎて(?)こんなふうになったペアも　8水呑地蔵院に到着。縁起によれば承和3年（836）に僧・壱演により安置された。現在の地蔵菩薩像は元禄7年（1694）の造立　9冷たい湧き水に狂喜する須飼さん　10県境稜線にある国の民俗文化財・十三塚の石碑にもお地蔵さんが彫られている　11十三峠の石仏は明和2年（1765）の造立だ　12十三峠のお地蔵さんの位置から大阪平野を見下ろす。夕暮れは絶景だ

立石峠のお地蔵さんのあのお顔にヤラれた！

十三峠で須飼氏と別れた後、国境稜線を南下し、立石峠から「立石越え」の道を下ると、10分も経たないうちにこのお地蔵さんに出会う。神々しいお顔には癒やされました。休憩してお弁当を広げるようなスペースはないが、何度もシャッターを押したくなる穏やかな表情。このお地蔵さんのためだけに、立石越えを登る価値はあります！

享保20年（1735）から280年、峠を通行する人びとを見守る。よだれ掛けがなく、周囲の自然と完全に同化している

八尾で見守り、見守られ…700年のスター地蔵をめぐる。

「明王朝の誕生」「グーテンベルクの活版印刷」「コロンブスの新大陸発見」……そんな遠い時代よりも前に生まれたお地蔵さんが、あなたのご近所にいる。そのお地蔵さんが「そこにある」こともまた、いろんな偶然の産物だ。お地蔵さんと地元の歴史を探るのが大好きで、自らを〝高安婆〟と名乗る坂上弘子さんと一緒にめぐりました。

取材・文＝中島 淳　写真＝内池秀人　監修＝坂上弘子

「橋」の時代もくぐり抜け安産守護を引き受けてきた。

大通寺一帯は高安山麓の中でも「門前町の風情」を醸すエリア。通りに面した地蔵堂に安置されているのが子安地蔵だ。人びとの信仰と安らぎの対象なのに一時期、近くの小川に像面を下に向け、石橋として使われていた。

「明治維新の直後は、廃仏毀釈のために多くのお地蔵さんが橋などにされたんですね。東本町の高（多嘉）地蔵や東山本町の万願寺子安地蔵、刑部の東地蔵などもそうでした」と坂上さん。

高安山麓の静かな住宅街にある。大通寺は河内西国第十五番霊場にあたる

大通寺子安地蔵
正和2年（1313）
その頃→ダンテ・アリギエーリが『神曲』を完成（1321年）／後醍醐天皇が第96代に即位（1318年）

中央で折損しているが、総高150㎝、最大幅83㎝の凝灰岩に像高130㎝、肩幅40㎝の地蔵石仏を厚肉彫りしてある。鎌倉時代の剛健な面貌と衣文の表現が豊か。右隣は室町時代前期に造立された矢高地蔵　●八尾市教興寺7-110

やがてはどのお地蔵さんも新しいお堂に安置されていったのだが、それは「お地蔵さんを橋に使たりしたらアカンやろ」と言い出した人がいるから。名前は残らずとも、地元の歴史はそんな人たちがつくっていることを知る。

この子安地蔵が造立された当時の日本の人口は約800万人。庶民が普通に子どもを産み、大人に育てることが困難な時代からずっと人びとを見守ってきた。その頃に比べたら今は子どもを産み育てることは楽ではないが困難さは確実に減り、かつての15倍もの数の人間がこの国に暮らしている。

洪水で流れて来たお地蔵さんが偶然、ぴたっと止まった！

坂上さんはいつもお地蔵さんに関心を持っている。八尾だけで173箇所を訪ねて聞き取りを行い、冊子や記事に残してきた。高安城をさぐる会の会員でもあり、高安能の復活と定着に力を入れておられる好奇心と行動力の人だが、「今日は案内人やないよ。自分が楽しいから一緒に回っているだけ」というスタンスが一貫している。唯一、リクエストされたのは「天王寺屋地蔵は、地元でお世話をしている氏子さんと連絡がつかないと、お顔を拝めないからね」であった。それで氏子の一つであるお家の方と連絡をとって訪問。

「大和川（付替え前）の大洪水の時に流されてきたんですね。下流の老原のほうに流れて行くかなと思ったら、境目でぴたっと止まったと言われています。それがご縁ですね」（氏子の1人）

もう少し先へ流れていたら、八尾で唯一の13世紀生まれのお地蔵さんには別の名前が付いたことだろう。天王寺屋地蔵の成り立ちにはいろいろ説があるものの、「地元の言い伝えがいちばん信用できるからね」と坂上さん。

地蔵堂のカギを開けてもらい、ご対面していたらすぐに自転車に乗った30代ぐらいの女性が「今日、初めてお姿を見ました。お参りしてもいいですか」と。地蔵盆の時にしか開かない扉の前で、気になっている人は多いんだな。このお地蔵さんは大和川の土砂と一緒に、どのあたりから流れてきたのだろうか……と気になった。

軟質の花崗岩を使用。総高125㎝で蓮華座に立つ。像高は92.5㎝。弓削寺または近くにあった老原廃寺のいずれかに関係あると言われ、明治中期の「川ざらえ」の時に発見されたという説もある。ここも安産に霊験が　●八尾市天王寺屋2丁目

天王寺屋地蔵
（八尾市指定文化財）
永仁5年（1297）
その頃→ヴェネツィアの商人マルコ・ポーロがアジアの旅を終え帰国（1295年）／鎌倉幕府が永仁の徳政令を出す（1297年）

左／ふだんは格子戸越しなので、お顔を見ながら熱心にお参りしていた方。右手奥は稲生神社　右／八尾のお地蔵さんの中では珍しく、国道沿い（25号線）にある

お地蔵さんを戦に利用すると天罰がくだる！

「八尾にこんなにお地蔵さんが多いのは、何か理由があるんでしょうか」

素朴な疑問を投げると、坂上さん曰く「昔から〝河内は乳母と養子の里〟と言われてきました。大和川の付替え前まではあまり豊かではなかったと思いますが、子どもを育てるいろんな知恵があったんやないですか。お地蔵さんに対する信仰と子育ては切っても切れないし」。自ら、孫たちに「高安婆」と呼ばせる大先輩のひと言は深い。八尾はオッサンより女の人が強いな。最後に訪れたのは高塚地蔵。八尾北高前を走る道の角に道標まである。

「ここは大坂夏の陣の戦場やったからね」。そう、「若江の合戦」はまさにこの辺り。木村長門守重成の墓も近い。

地蔵堂に大きな広葉樹が華を添える。人物は坂上さん

高塚地蔵
成安3年（1301）
その頃→イングランド王エドワード1世が王子エドワードに、初の「プリンス・オブ・ウェールズ」の称号を授ける（1301年）／足利尊氏の誕生（1305年）

花崗岩製。高さ150㎝、幅85㎝の不整形なもので、大きな舟型彫り込みの中に像高115㎝の地蔵立像を陽刻。端正だが摩滅が甚だしい。近くの加津良神社の「カツラ」に「多」を冠して、それがタカツカに転じたという説も　●八尾市泉町1丁目

以下、八尾市教育委員会の碑文。

「若江合戦で大坂方の吉田内匠が、この地蔵堂の陰から槍をもってとび出し、東軍の藤堂式部をおそったが、かえって討死したという」

地蔵堂は砦ではない。その後400年の間も何度か戦争はあったが、この地で人間の殺し合いは起こらなかった。それは高塚地蔵のお陰かもしれない。

「ちゃんと人が座れる場所がありますやろ」。お堂自体はコンクリートブロックにブリキの屋根と風情は乏しいものの、お地蔵さんを隔てる格子扉やカギもない。この地蔵堂自体が「地域の社交場」になっていることが分かる。暗くてもお線香をあげられるように、電球もある。東隣は高校、西隣は工場。典型的な八尾の風景の中に、700年生きたお地蔵さんが普通にいる。

「お地蔵さんがいるのは人の暮らしがあるから。お世話されているのはそれだけ暮らしやすい場所やということやね。歴史は人がつくるから、お地蔵さんを見ればその土地がわかりますよ」

坂上さんが、筆者が、そして今年生まれた子どもたちが寿命を全うしてもなお、このお地蔵さんたちはもっと長生きすることだろう。22世紀に入って、人が普通に空を飛んでいたとしても、地蔵堂が超ハイテク素材になったとしても、中のお地蔵さんは時代を超えて手を合わせる人を迎えるに違いない。

八尾のお地蔵さん年表

※地図はP11を参照

- **平安前期** ●小野篁が常光寺に地蔵菩薩立像を製作（伝承）
- **平安前期** ●水呑地蔵（P7）が僧壱演により安置（伝承）
- **1280年** ●法心が慈願寺を創建
- **1297年** ●天王寺屋地蔵（P8）
- **1301年** ●高塚地蔵（P9）
- **1313年** ●大通寺子安地蔵（P8）
- **1336年** ●楠木正成、湊川の戦いで破れ、自害
- **1465年** ●蓮如、慈願寺を訪れる
- **1467年** ●応仁の乱
- **1471年** ●高（多嘉）地蔵（P5）
- **1481年** ●油掛地蔵（P5）
- **1490年代** ●蓮如、久宝寺跡に西証寺を建立
- **1542年** ●蓮淳、顕証寺御堂を完成
- **1544年** ●シュミイ地蔵（P3）
- **1552年** ●許麻橋地蔵（P5）
- **1558年** ●常光寺水子地蔵（P3）
- **1560年** ●桶狭間の戦い
- **1569年** ●永禄地蔵（恩智）
- **1615年** ●大坂夏の陣
- **1679年** ●『河内鑑名所記』出版
- **1704年** ●大和川の付替え
- **1735年** ●立石峠の地蔵（P7）
- **1753年** ●安中元地蔵（P6）
- **1765年** ●十三峠の地蔵（P7）
- **1801年** ●『河内名所図会』出版
- **1846年** ●服部川八幡宮の地蔵
- **1847年** ●跡部地蔵（亀井）
- **1868年** ●明治維新で廃仏毀釈

〈造立年不明なもの〉

- **鎌倉時代** ●大門地蔵（P6）
- **室町前期** ●今口地蔵（P5）
- ●矢高地蔵（P8）
- **室町末期** ●札の辻地蔵（P5）

澄んだ空気にお囃子が響く八尾の秋祭り。

盆踊りがひと息ついた頃に、また祭囃子が聞こえてくる。
八尾の10月は五穀豊穣を祈願する秋祭りで熱い。
秋祭り特集は前号に続き、当事者たちが語る
「見どころ」にスポットを当ててお届けします。

取材・文=きむあつこ　写真=内池秀人(太田)

巽(たつみ)町　法被や提灯、幟など赤で統一。太鼓囃に定評あり

太田地区秋まつり

(巽町・西川町・田中町・免田町・北町・東町)
10月8日(土)・9日(日)

地区内のだんじりの数はダントツ。色とりどりの法被で担ぎ合う！

うちの祭りは1町に1台、6町で6台というだんじりの多さが特徴です。初日（宵宮）は15時頃から自分の町を巡行し、19時半に大正小学校のグラウンドに全だんじりが集合。だんじりの担ぎ合いを行い、4分間の持ち時間でどれだけ長く美しくしゃくれる（持ち上げる）かを競うんです。提灯に灯が点いた状態での小学校での担ぎ合いは初の試みで、子どもたちに伝統行事への親しみと地域の楽しさを知ってもらえたらという願いから実現しました。

2日目（本宮）は8時から順に全だんじりが太田八幡宮に宮入し、10時半から宮出。6台が連なりながら6町全体を巡行します。自分の町内や要所ではだんじりの担ぎ上げを披露。町内のどこにいても祭りが満喫できます。

北野智傑さん
(太田青年會本部団長)

全体運営や警備を担う。「一時地元を離れましたが、隣近所を知る関係は子育てにいいと思い、戻ってきました。祭りは地域づくりの力になります。この伝統行事を次世代に継承したいですね」

2015年に発足した［太田地区秋祭り実行委員会］。全体運営がスムーズになったという。前段左端が北野さん

田中町　太田で一番新しいだんじり。獅子噛の目が光る

免田(めんでん)町　法被の色はだんじりの鶯の彫り物から

東町　祭りの最後に、だんじりの上から餅まきを行う

西川町　今年から法被を一新。担ぐ練習はどこよりも熱心

北(きたん)町　太田で最も古いだんじり。太鼓囃に注力

西郡天神社

(泉町・幸町・桂町)
10月29日(土)・30日(日)

秋祭りの最終日を飾るのがこの。だんじり囃子の巧さに遠方からも。

昔はいつも10月24・25日でしたが、平日に当たるとだんじりの曳き手が足りないので、それに近い土日に祭りをやるようになりました。宵宮の8時に西郡天神社(にしごおりてんじんしゃ)で御祈祷したのち、9時にだんじりが宮出し、町内を巡行。21時に宮入します。本宮もほぼ同じスケジュールで行います。うちの祭りは、お囃子に力を入れていて、大阪の有名な講元［上方地車囃子保存会］に所属する実力派が数人います。地元・幸町にある木村重成の墓前で毎年行う［木村祭］などで、だんじり囃子を披露することもあります。［若中地車囃子・祭華］という青少年を指導するグループをつくり、年間通じてだんじり囃子の稽古をしています。子どもとはいえ、大人顔負けの腕前ですよ。

出口佳己さん
(西郡地車保存会会長)

小4の頃から祭囃子を担当。「28歳のとき天神祭のだんじり囃子に衝撃を受け、［上方地車囃子保存会］で習いはじめましたが、ここに入るだけでも苦労しましたね」。家族全員がだんじり囃子を奏でる

ちょっと肌寒い季節だが、祭りの熱気は十分だ

まだまだ秋祭りスケジュール

●10.8(土)・9(日)
式内御野縣主神社 上之島町南・上尾町
加津良神社 萱振町
太田新町秋祭り
寶殿神社 沼
樟本神社 木の本
樟本神社 南木の本
●10.9(日)
穴太神社 宮町
杵築神社 佐堂町
若林町秋祭り
●10.15(土)・16(日)
三十八神社 福万寺町
由義神社 八尾木
●10.22(土)・23(日)
新家町秋祭り

加津良神社(萱振町)の秋祭り

「お顔」だけがお地蔵さんじゃない！

恩智の目無し地蔵や末広町のどもり(土盛)地蔵、亀井の榎木地蔵、黒谷のいもころ地蔵のように、いわゆる「お地蔵さんの顔・形」と違うものも数多くあり、これらが八尾のお地蔵さん文化をより豊かでユニークなものにしている。

目無し地蔵は東高野街道を越えた恩智神社の鳥居そば、三角おにぎりの形

八尾レトロ―昨日を語る風景

生まれは明治12年（1879）。小学校としてまず56年間。地域の会合で81年。現役！

萱振町連合町会集会所（萱振町）

●八尾市萱振町6-46

恵光寺（えこうじ）と加津良（かつら）神社の間、「萱振寺内町」のど真ん中。かつては「村で一番早く朝日を浴びる学舎」であった

大阪では近代建築ブームが続き、中之島や北浜・淀屋橋一帯は休日でもビルウォッチングを楽しむ観光客で溢れている。お目当ては20世紀前半生まれの府立中之島図書館や大阪市中央公会堂、綿業会館など。なかでも大阪市立愛珠幼稚園（1901年竣工・いずれも重要文化財）は船場の豪商たちが財産を出し合って建てた、現役の教育施設として熱い視線を浴びている。

その愛珠幼稚園が竣工するはるか以前、明治初期に堺県下の萱振村で生まれた萱振小学校が、連合町会の集会所として「第二の人生」を歩む。

「私の頃はこの小学校が閉校（1935年）していたので、八尾北部国民学校（現・用和小学校）に通いましたが、母は萱振小の卒業生です。当時は一面田んぼで山本高校が見えていました。今こども会が使う南側の部屋は戦後しばらく、近所の人が脱穀場に使っていました」（萱振町在住・東野隆司さん）。昭和23年（1948）に旧八尾町から萱振農事実行組合に無償譲渡され、現在は連合町会の管理に。

ひらがなも足し算も分からない幼児は、小学校という空間で急速に成長する。教室だった場所には教え・学び、話を積み重ねてきた萱振の人々の137年にわたる「気」が溢れ、加津良神社の秋祭り（P11）を楽しむ子どもたちの写真がいっぱい飾られていた。昔から変わらぬ光景だ。

取材・文＝中島 淳

左／「學」と「萱振」の字が浮彫にされた屋根瓦（北村茂章さん撮影）中／かつての教室、現在は「大会議室」に。教員室は「小会議室」として使用可能　右／東野さんのお母さん、森田末子さん（真ん中の列の右端）と同級生（1920～21年頃の撮影）。建物の構造は今と同じだ

お好み焼き・各駅の顔じまん

味よし（JR志紀駅）

「食事だけでなく宴会でもぜひ。途中や〆のお好み焼きはたまりません」

●推薦人・藤崎千里さん

志紀町在住の団体職員。「久しぶりなので、新メニューに挑戦。イタリアンはふんわりしたピザの味やね」

定食や一品に力を入れ、一見居酒屋風だが大きな鉄板がある。平岡由美子さんは高校生のバイト時代から32年。「娘のようなもんです」と吉澤さん

志紀駅周辺で住宅開発が盛んになりはじめた昭和50年（1975）頃、駅北のマンション1階に出来た店で、もう40年になります。女性3人が元気に切り盛りしていて、祖母・母・娘と思っていたらそうじゃなくてびっくりしましたが、いつも仲良しなのは見ていて気持ちいいですね。座敷もあって、私はバドミントンの試合の打ち上げによく利用していました。チームにインドネシアの青年が数人いたときがあり、彼らはイカ玉やエビ玉を喜んで食べて食欲旺盛でした。ソース味は東南アジアにもウケるんだ、と感心したものです。

お好み焼きは家でも作れますが、やっぱり長い間使い込んだ鉄板で焼いたものは全然出来上がりが違いますよ。「味よし」のは生地の表面がカリカリで中はふわふわ。冷凍のイカではなく新鮮なスルメイカを、豚は上質のロースを使っているので、材料の良さは食べて納得です。お持ち帰りもしますが、少々冷めても風味が落ちなくてさすが。

おばちゃん（吉澤礼子さん）の楽しいトークと新しいメニューに研究熱心なこと、レトロっぽい落ち着いた雰囲気がこの店の魅力だと思います。

取材・文＝きむあつこ　写真＝内池秀人

イタリアン880円。溶けるチーズ、ベーコン、玉ねぎ、トマト、ピーマン等をのせ、仕上げはピザソースとマヨネーズ。「これに餅を入れたらもう！」と吉澤さんは写真NG、でも話術は絶妙でした

お好み焼きのトッピングにも人気のどて焼580円。和牛のすじ肉を約6時間煮込み、むっちりうまい

味よし

●八尾市天王寺屋7-19
志紀マンション106
☎072-949-8035
11:00～22:00　水曜・第3火曜休

ヤオマニアの横顔

作家

上田秀人さん

「八尾が舞台の小説をやっと世に出せます」

自宅兼仕事場の近くにある母校・久宝寺小学校と今口地蔵尊（P4）をバックに。大坂夏の陣で長宗我部盛親（ちょうそかべもりちか）が敵情を視察したと言われる「物見の松址」もある。小学校時代、夏休みに校舎が火事で全焼し、休み明けからしばらくプレハブの建物で勉強した

生まれも育ちも八尾で、ここを離れて暮らしたことは一度もありません。大学を出て歯医者になってからも、八尾の実家の横で開業しました。開業日に近所の方が患者さんとして並んでくれたのがうれしい思い出です。

子どもの頃はよく近所の幼なじみと八尾天満宮で遊んで、池の亀を獲っては宮司さんに追い掛け回されたものです。毎月11日と27日のお逮夜市に、沢の川通り（現・八尾ファミリーロード）に庭仕事の道具を探す父と出かけて屋台をひやかすのも楽しみでした。

小説を書こうと思ったのは30代半ばの時、完成間もない梅田スカイビル（1993年竣工）を電車の窓から見たのがきっかけです。「あれを作った人は、きっと子どもに〝お父さんがこれを建てたんや〟と自慢できるんやろうな」と思いましてね。歯医者もやりがいはありましたが、自分も息子に「これを作った」と言える仕事がしたくなったんです。

少年時代から時代小説マニア。

それで、作家の山村正夫さん（1931～99）が主催する東京の小説教室に毎月通い始めました。最初に書いたのは歯科医が主人公の現代小説です。山村先生には「自分の専門分野を書いても読者にはわからないよ」とアドバイスされて、次に何を書こうかと悩んだ時、たまたま私の大学に坂本龍馬の死体検案書の写しがあったことを思い出したんです。龍馬は頭を切られて脳に達する傷を受けたのに、死ぬ間際まで話ができたというのが不思議で、その謎を解く話を書きました。するとそれを読んだ山村先生から「君はこの方向で行きなさい」と褒められましてね。その作品が歴史・時代小説の道に入ったきっかけです。

父はNHKの大河ドラマが好きで、原作小説を毎回買い揃えていました。それで私も小学校の低学年で『天と地と』を読んだりしていて、歴史ものには幼い頃からなじんでいたんです。歴史・時代小説は約束事も多く、織田信長は必ず本能寺で死ぬし、徳川家康といえば「狸親父」というイメージを日本人みんなが持っています。現代小説はゼロから小説の登場人物や設定を考えなければなりませんが、時代小説は一度勉強すれば、その知識を生かしてずっと書き続けられますから。

「自作百冊」の次は「30年現役」。

専業作家になったのは2013年。それまでは歯医者を続けながらの執筆で、診療の合間の5分で2行でも書く、といった日々を過ごしていました。でも締め切りには遅れたことがないんです。何年か前に、ホスピスの看護師さんからお手紙をもらったのですが、「末期の患者さんに先生の小説を勧めています。皆さん〝面白い。先が楽しみだ〟と言って、喜ばれて亡くなっていきます」とあるのを読み、「小説を書けるうちは、何が何でも書き続けるのが自分の使命だ」と思うようになりました。

書き始めた当初は、生涯で百冊の小説を書くのが目標でしたが、デビュー19年目の昨年に達成しました。今は「30年現役作家でいること」を目指しています。現在、『中央公論』で連載中の大坂夏の陣を描いた小説『翻弄』で、初めて八尾を舞台にしました。地元の方に読んでいただけたらうれしいですね。

取材・文＝大越裕　写真＝内池秀人

一日に原稿用紙24枚、月間で450枚の執筆を課す。旗本や勘定吟味役、将軍の髷を整えるお髷版、江戸城の書類作成に関わる奥右筆、さらには妾屋など、様々な職業の主人公が活躍するのが上田作品の魅力だ

うえだ・ひでと
1959年大阪府生まれ。大阪歯科大学卒。『身代わり吉右衛門』で'97小説CLUB新人賞佳作、2001年『竜門の衛』（徳間文庫）でデビュー。歴史知識に裏打ちされた骨太の作風で注目を集め、江戸城の役職を取り上げた時代小説シリーズが次々にヒット。『孤闘 立花宗茂』（中公文庫）は第16回中山義秀文学賞を受賞。2009年と2014年に『奥右筆秘帳』（講談社文庫）が「この文庫書き下ろし時代小説がすごい！」の第1位に輝く。2014年には作家別でも第1位に。2015年、八尾市文化賞受賞。

パン屋は街の入り口だ⑪

山本町南 コモモベーカリー

満を持して地元でオープン！女性職人がつくるパンの味はお墨付き。

近鉄河内山本駅を降りて、山本南商店街をぶらぶら歩くと絵本に出てきそうなかわいいパン屋さんが！ 今年2月にオープンしたばかり。店主の黒田潤子さんには開業前からすでに固定ファンがいて、地元での出店が待ち望まれていたという。

「両親が商売人だったので自分も店がしたくて、最初目をつけたのがカフェ。そこでの厨房の経験からおいしいパンに目覚め、本格的に勉強したんです。足かけ10年、複数のパン屋さんで修業しながら、知人などから予約をいただいていました。この道が用意されていたような気がします（笑）」

開業直前に「八尾で基礎から学ぶ創業スクール」に通い、特徴的な店にというアドバイスからショーケースで対面販売する方法を選んだ。「最近、このタイプのパン屋さんが出てきていますが、八尾ではまだ少ないと思います。応対に人手がかかりますが、パンの説明や質問に答えるなどお客さんと会話がはずみますね。清潔感もあるのでこの売り方がいいと褒められます」

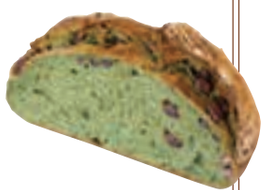
黒田さんが以前働いていた店は大阪の堀江公園近くにあったパン屋さんでハード系が主流だった。「その路線を狙いたいですが、意識してやわらかめの菓子パンを増やしました。まだ始まったばかりなので知ってもらうことが先決。店とともに自分も成長したいなと思っています」。一度行けばファンになる、チャーミングな店である。

取材・文＝きむあつこ　写真＝内池秀人

「ナチュラルすぎず、子ども部屋のようなかわいいインテリアをめざしました。でもなんの店かわからないと言われ、パンと大書した看板を置いたんですよ（笑）」と黒田さん（中央）。永田ちさとさん（左）と藤村朱美さんは黒田さんのパンが好きで店のスタッフに

「コモモの食パン」1斤300円。国産小麦をブレンドし低温発酵させて焼いた窯のびのいいパン。適度な塩味と香りがすばらしい

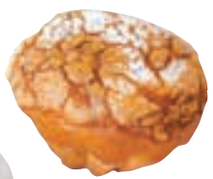
「カンパーニュ・ドライフルーツとくるみ」1,500円、4分の1カット375円。もっちりした生地とたっぷりの具材がよく合う。おみやげにもいい



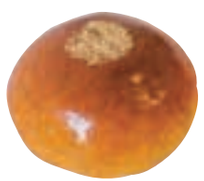
「カンパーニュ・和」1,200円、4分の1カット300円。生地に混ぜたよもぎ粉とほんのり甘い大粒あずきが、まさに「和」の風味。人気に納得

商品は約50種。「一人でつくっているので少量多種。時間差で違う種類のパンがどんどん並びます」

「しあわせのまるぱん」3個150円。ほんのり甘い生地は軽くトーストすると焼きたての味に。雨の日はてるてる坊主の焼き印が



「オレンジマカロン」180円。甘い菓子生地にオレンジピールを入れた手づくりのカスタードクリームが詰まっている



「滝さんの粒あんぱん」130円。店主が惚れる製餡所のあんを使用。ほどよい甘さのたっぷり粒あんに満足必至

コモモベーカリー

●八尾市山本町南1-9-15
☎072-991-8686　10:30～19:00
（売切次第終了）　日・月曜休

ヤオマニアの心ときめく秋～冬カレンダー

※会場はP11のMAPでお確かめください。お問い合わせ先が特にないものは八尾市観光協会まで☎072-997-6226

9.17(土)・18(日)　河内木綿まつり
→八尾市立歴史民俗資料館をはじめとする市内の各会場で河内木綿の展示や綿繰り、糸紡ぎ体験、関連商品の販売など
☎072-941-3601（八尾市立歴史民俗資料館）

9.22(木・祝)　わたの収穫祭
ー夢のコットンロードin佐堂ー
●大阪中央環状線高架下　佐堂町の綿畑
→綿摘み、綿繰り、糸紡ぎ体験
☎072-923-1246（NPO法人河内木綿藍染保存会）

9.22(木・祝)
秋の全国交通安全運動“市民の集い”
●アリオ八尾

9.24(土)・25(日)　八尾木民芸つくりもん祭り
●八尾木地区
→今年収穫した野菜や穀物で人形や話題のキャラクターをつくり、民家の軒先や庭に展示して五穀豊穣を願う江戸時代からの伝統行事

10.2(日)・11.6(日)　朝市“ようさん市”
●山本南商店街　9:00～12:00

10.2(日)　河内音頭定期公演
●山城町一丁目第1公園　13:00～15:00
→信貴一若師匠

※11.19(土)・20(日)　関西文化の日
八尾市内文化財施設の観覧無料
歴史民俗資料館、埋蔵文化財調査センター（☎072-994-4700）、しおんじやま古墳学習館、安中新田会所跡旧植田家住宅（各休館日を除く）

●花岡山 伊勢物語フェスティバル2016
連続講座 伊勢物語と能
大阪経済法科大学八尾駅前キャンパス 受講無料
12.3(土)　講座①　10:30～12:00
→講師　浅見 緑（大阪経済法科大学教授）
12.10(土)講座②　10:30～12:00
→講師　石上 敏（大阪商業大学教授）
2017.2.4(土)講座③　10:30～12:00
→講師　山下麻乃（観世流シテ方能楽師）

10.15(土)　高安薪能
●玉祖神社境内　17:00～19:00
→『熊野（ゆや）』の上演。立ち見観賞は自由。有料イス席は1,500円。チケットはプリズムホールチケットカウンターへ（☎072-924-9999）

10.23(日)
いきいき八尾環境フェスティバル2016
●西武八尾店、アリオ八尾、大阪経済法科大学花岡キャンパス、八尾駅前キャンパス　10:00～16:30

11.6(日)　河内音頭定期公演
●山城町一丁目第1公園　13:00～15:00
→橘家栄枝朗師匠

11月　第63回八尾市文化芸術芸能祭
●八尾市文化会館（プリズムホール）
11.6(日)　俳句・短歌部門
11.11(金)～13(日)展示部門
→手芸、絵画、書道、写真、華道など
11.12(土)・13(日)芸能部門
→バレエ、ダンス、日本舞踊、吹奏楽など
☎072-924-3876（八尾市生涯学習センター）

●八尾市立歴史民俗資料館
～10.3(月)　企画展「藍-阿波から河内へ-」
→阿波藍の紹介と阿波藍で染めた河内木綿の展示
9.24(土)　近世古文書講座
「初級編 みんなで「綿圃用務」を読みましょう!」
「中級編 古文書をすらすら読みましょう!」
9.25(日)　資料館歴史講座
戦国時代の河内「大坂本願寺合戦」
→講師　小谷利明館長
☎072-941-3601

●安中新田会所跡旧植田家住宅
10.22(土)～12.23(金・祝)
企画展「植田家にのこる浮世絵っ!?」
→肉筆浮世絵を含む植田家に伝わる様々な浮世絵を展示
10.30(日)　講演会「上方役者絵の話（仮題）」
→講師　北川博子（あべのハルカス美術館）
11.19(土)　植松灯籠の日
夜間開館で観覧は無料　17:00～20:30
☎072-992-5311

●八尾市立しおんじやま古墳学習館
～9.30(金)　ふしぎ探検クイズラリー
10.1(土)　しおんじやま学び場
「大阪市・加美遺跡、河内平野の弥生王墓」
→講師　田中清美（大阪文化財研究所）
☎072-941-3114

●今東光資料館
9.17(土)～2017.3.12(日)
特別展示「今東光と藤本義一」
☎072-943-3810

八尾探リポート　YAOTAN 八尾探

色とりどりの浴衣も決まって、いざ常光寺の地蔵盆へ

8.23(火)
浴衣の着付けレッスン&河内音頭体験

八尾観光「八尾探」も8回目。まずは、河内音頭記念館にて山川博子先生による河内音頭教室。皆さん上達が早く、基本の「手踊り」だけでなく、リズミカルに飛び跳ねる「マメカチ」、流れるような「なみはや踊り」までマスターしました。踊りの後は、上方舞山村流師範の山村若静和先生による浴衣の着付け。簡単キレイに着るコツを教えてもらい、いざ常光寺へ。音頭のリズムに合わせて笑顔で軽快に踊る姿は、立派な八尾の踊り子さんでした。お疲れさまでした。レポート＝近藤由美子

もう一周踊ろかーと、すっかり輪になじんでいました

難しそうに見える帯の結び方も、あっという間でした

前・右・左・腕は肩より上で～、と輪になって踊ります

表紙「十三峠のハイキング」

たくさんのお地蔵さんが並ぶ十三街道は、ハイキングコースとしても人気です。河内と大和を結ぶ交通の要所でもあり、昔はいくつもの茶屋もあったようです。歴史ロマンに触れながら、一体一体表情の違うお地蔵さんを見て、通り行く人々は何を思い、峠道を歩いたのだろうと考えました。木々の薫りや流れる水の音、木漏れ日の美しさに、心が癒されます。少し汗ばみ、水呑地蔵尊にたどり着くと、最高の眺めがまた、疲れを取り去ってくれました。（須飼秀和）

すがい・ひでかず　1977年明石市出身。日本の原風景や人びとの営みに映る郷愁を描く。著書に『私だけのふるさと』（岩波書店）ほか。姫路のギャラリールネッサンス・スクエアで11.5（土）～20（日）に「生野学園師弟三人展」を、神戸のギャラリー島田で11.26（土）～12.7（水）に個展を開く。P7も必見

●Yaomania第17号は12月上旬発行

「八尾の手みやげ」何にします？

発行＝一般社団法人八尾市観光協会
編集＝株式会社140B　表紙絵＝須飼秀和
デザイン＝山崎慎太郎　印刷＝図書印刷株式会社
※記事の情報は、2016年8月31日時点のものです。
※おわび　前号P14のよしんぼ（半夏生団子）の写真が間違っていました。大変失礼いたしました。